

ヘルス・プロモーティング・スクールを推進する教員研修と評価 —2010年度に実施した基礎研修と総合研修を対象に—

岡田加奈子¹⁾ 藤川大祐¹⁾ 中澤 潤¹⁾ 小橋暁子¹⁾ 砂上史子¹⁾
磯邊 聡¹⁾ 北島善夫¹⁾ 七澤朱音¹⁾ 揚原祥子¹⁾ 石井克枝¹⁾
高橋浩之¹⁾ ベヴァリー・ホーン¹⁾ 宮寺千恵¹⁾ 鎌塚優子²⁾
福嶋 俊³⁾ 保坂 亨¹⁾ 安田一夫⁴⁾ 高野義幸⁵⁾ 岡野美智代⁶⁾
江波戸裕子⁷⁾ 椎名和浩⁷⁾ 上村チエミ⁸⁾ 澤田貴子⁹⁾

¹⁾千葉大学教育学部 ²⁾岐阜聖徳学園大学 ³⁾NPO法人企業教育研究会

⁴⁾千葉県総合教育センター ⁵⁾千葉県立千葉東高等学校 ⁶⁾富津市立吉野小学校

⁷⁾千葉県教育委員会学校安全保健課 (2010年当時) ⁸⁾掛川市立中小学校 ⁹⁾さいたま市立春岡小学校

Evaluation of the Education Program about Health Promoting School for Teachers

OKADA Kanako¹⁾ FUJIKAWA Daisuke¹⁾ NAKAZAWA Jun¹⁾ KOBASHI Satoko¹⁾
SUNAGAMI Fumiko¹⁾ ISOBE Satoshi¹⁾ KITAJIMA Yoshio¹⁾ NANASAWA Akane¹⁾
AGEHARA Syoko¹⁾ ISHII Katsue¹⁾ TAKAHASHI Hiroyuki¹⁾ HONE Beverley¹⁾
MIYADERA Chie¹⁾ KAMAZUKA Yuko²⁾ FUKUSHIMA Shun³⁾ HOSAKA Toru¹⁾
YASUDA Kazuo⁴⁾ TAKANO Yoshiyuki⁵⁾ OKANO Michiyo⁶⁾ EBATO Yuko⁷⁾
SHINA Kazuhiro⁷⁾ UEMURA Chiemi⁸⁾ SAWADA Takako⁹⁾

¹⁾Faculty of Education, Chiba University ²⁾Gifu Shotoku Gakuen University

³⁾The association of Corporation and Education ⁴⁾Chiba Prefectural General Education Center

⁵⁾Chiba Higashi High School ⁶⁾Futtsu Municipal Yoshino elementary school

⁷⁾Chiba Prefectural Board of Education ⁸⁾Kakegawa Municipal Naka elementary school

⁹⁾Saitama Municipal Haruoka elementary school

ヘルス・プロモーティング・スクールとは、「学校を中核として地域社会や家庭のもとに包括的に進める総合的な健康づくり」のことである。2009年4月には学校保健安全法が施行され、すべての教員が健康観察、保健指導を行うことが義務付けられた。このような背景の中、すべての教職員が心身の健康上の課題に対応する基礎的な能力を獲得することが求められている。しかしながら、現在教員になるための養成教育においては、学校保健に関する学習は必須ではない。それゆえ、これらの基礎的な能力は、教員になった後の研修に頼らざるを得ない。そのような中、千葉大学教育学部では様々な専門のメンバーが参画するヘルス・プロモーティング・スクール・プロジェクトを開始した。そして、2010年度には取り組みの一つとして教員対象を対象とするヘルス・プロモーティング・スクール（以下、HPSとする）の研修プログラムを開発、実施した。2010年度に開発した本研修プログラムは高く評価された一方、リーダー研修などの今後の開発の方向性が明らかになった。

キーワード：ヘルス・プロモーティング・スクール (Health Promoting School) 教員 (Teacher)
研修 (Evaluation) 評価 (Education Program)

I. はじめに

ヘルス・プロモーティング・スクールとは、「学校を中核として地域社会や家庭のもとに包括的に進める総合的な健康づくり」(World Health Organization 1998, 衛藤隆 2005)として、WHOで提唱されてから1980年代に発展しはじめ、現在では、学校で健康を推進していく有効なアプローチとして、世界各国で精力的に取り組まれている。具体的には1992年に、ヘルス・プロモーティン

グ・スクール・ヨーロッパネットワーク (ENHPS) が始動し、2002年にはInternational Planning committeeが10年間にわたるヨーロッパの実践を元に、ヨーロッパにおけるヘルス・プロモーティング・スクールのモデルを発表した。しかし、文化の大きく異なるアジアとヨーロッパでは取り組みがかなり異なると考えられる。そのアジアにおいては、1996年以降、中国香港特別行政区、台湾が国家事業としてヘルス・プロモーティング・スクールを開始するなど、アジアにおいても発展してきている(籠谷恵 2009, 鎌塚優子 2010, Lee 2004, 2007, 岡田加奈子 2010, 東京学芸大学大学院連合学校教育学

連絡先著者：岡田加奈子

研究科ヘルス・プロモーティング・スクール研究プロジェクトチーム 2010)。

我が国においても、子どもたちの健康上の課題は多様化しており、各学校ではそれぞれの学校に応じた健康的な学校づくりが行われている(朝日新聞社 1998)。また、2009年4月には学校保健安全法が施行され、すべての教員が健康観察、保健指導を行うことが義務付けられた。このような背景の中、すべての教職員が心身の健康上の課題に対応する基礎的な能力を獲得することが求められている。

しかしながら、現在教員になるための養成教育においては、学校保健に関する学習は必須ではない。それゆえ、これらの基礎的能力は、教員になった後の研修に頼らざるを得ない。また、他国には見られない学校保健に関する専門家である養護教諭は、健康上の課題に対応するために職員や専門家・機関との連携のコーディネーターとして、これまで以上の役割を期待されている。

そこで、いじめ、不登校、アレルギー疾患等メンタル並びにフィジカル面での健康をはじめ、食育、感染症対策、特別支援教育、健康に大きな影響を与えるメディアリテラシー、さらに、健康観察・保健指導力、保護者・地域との連携等も含めた、ヘルス・プロモーティング・スクールに関する基礎的・総合的プログラムが必要となる。

それらを具現化するために、千葉大学教育学部では様々な専門のメンバーが参画するヘルス・プロモーティング・スクール・プロジェクトを開始した。そして、2010年度には取り組みの一つとして教員対象を対象とするヘルス・プロモーティング・スクール(以下、HPSとする)の研修プログラムを開発した。本論では、2010年度に開発した本研修プログラムを評価し、今後の方向性を検討することを目的とする。

II. 教員研修プログラムの種類

研修プログラムの開発に先駆けて、HPS概論の内容については、検討を繰り返し、DVDを作製した。また、HPSに関する各課題については、課題別研修等において、担当者がHPSの観点から内容の検討を行った。それらを踏まえて、教員研修プログラムを開発したが、実際の研修を考慮すると長い時間の研修を実施することは困難なため、理想的な研修プログラムとともに、より実現可能な半日程度のプログラムを開発する必要がある。そのため、2010年度は2種類の半日用研修プログラム【基礎研修】(教員対象と教頭対象)と多様な内容を盛り込んだ【総合研修】を開発・実施した。総合研修はすべてのプログラムを履修することが望ましいが、今回は、時間

の関係上、課題別内容については選択式とした。

III. 基礎研修

1. 基礎研修の内容

地域が抱える健康課題や研修のニーズは異なっており、また、複数の要因を持つ課題である場合が多いため、多くの健康課題やHPSに関係する内容を扱う必要がある。しかし、現実的には、時間は限られているため、複数ある研修課題のうち、重点課題に絞って研修を行った。ヘルス・プロモーティング・スクールの概論と各論2講義を組み合わせ、基礎研修とした。【教員基礎研修】においては、一般教員の参加が多く、フィジカルの教育と教職員のメンタルヘルスへの関心が高いという背景を考慮した研修内容とした。【教頭基礎研修】は教頭対象の研修であったため、学校全体のマネジメントの観点から、連携の講座と、近年問題視されてきているインターネットに関する問題を扱う講座としてメディアリテラシーの講座から研修を組み立てた。

2. 研修対象及び日時

(1) 教員基礎研修

対象は主として小中学校の教員(一般教諭、養護教諭)143名で、平成22年12月(3時間30分)に実施した。

(2) 教頭基礎研修

対象は小中学校の教頭43名で、平成22年12月(3時間)に実施した。

3. 評価方法

教員基礎研修の参加者143名、教頭基礎研修の参加者43名を対象に研修実施後質問紙調査を行った。なお、調査対象者の性別、現在の勤務校、現在の職務等の人数は表1の通りである。

4. 結果

1) 教員基礎研修

HPSについて、図1に示した5つの質問項目では、①～④の質問項目に対し「出来る」「やや出来る」と肯定的な回答をした者が多かった。ただ『⑤今後の自分の実践の中に具体的に取り組む』という質問項目については、肯定的な回答をしたものが4割に満たなかった。

また、研修会の満足度に関しては、「とても満足している」が40名(28%)、「まあまあ満足している」が87名(61%)と、合計ほぼ9割の者が満足していた。

さらに、『自分自身の変化(研修を受ける前と受けた後で、何か自分で変化したことがありますか)』についての質問では、96名(67%)が変化したと答えた。

表1 基礎研修参加者の属性

	参加人数	質問紙 回収枚数	性別		現在の勤務校		現在の職務		
			男性	女性	小学校	中学校	教諭	養護教諭	管理職
教員基礎研修	143名	143枚	6名	127名	91名	52名	22名	120名	1名
教頭基礎研修	43名	35枚	27名	6名	23名	12名	0名	0名	35名

(N = 143)

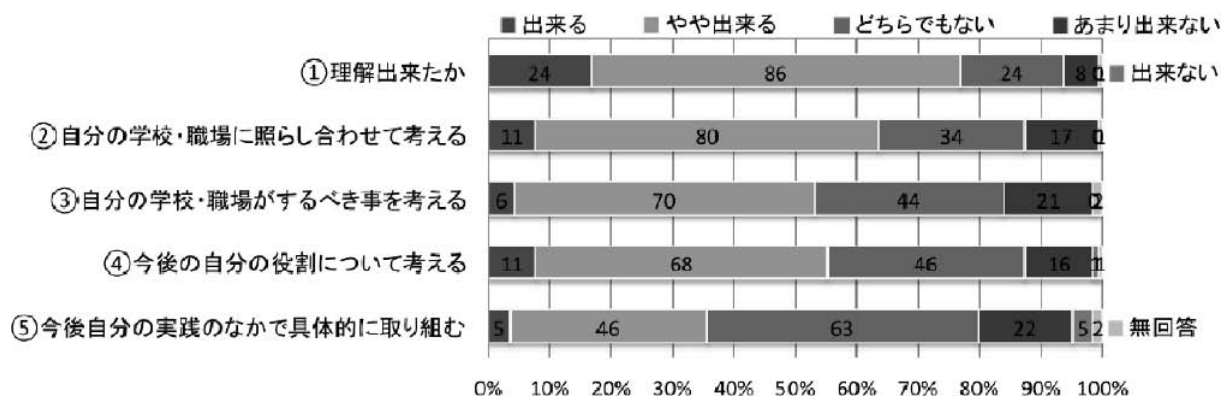


図1 HPSについて (教員基礎研修)

(N = 35)

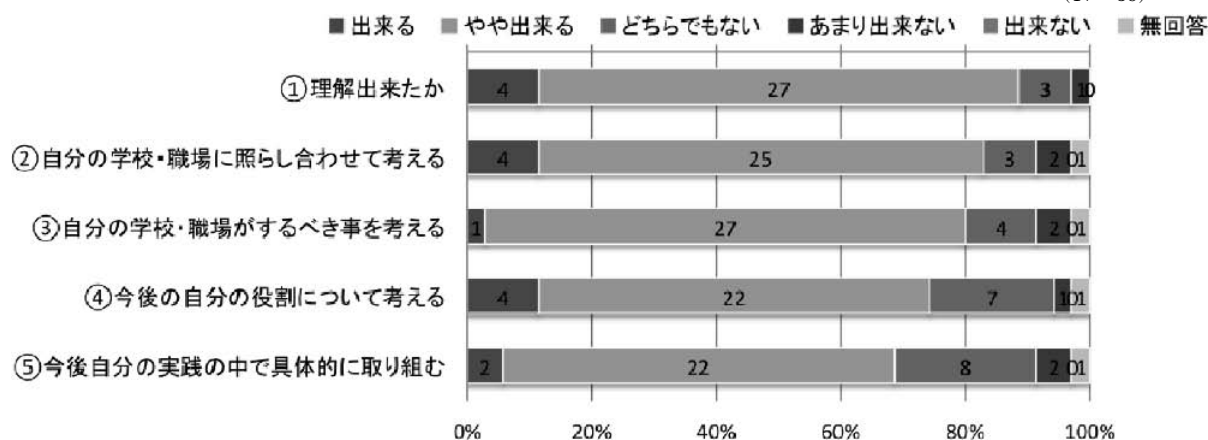


図2 HPSについて (教頭基礎研修)

さらに自由記述を分析した結果、【肯定的意見】、【否定的意見】、【要望】の3つのカテゴリーに分類された。

【肯定的意見】のカテゴリーは、20の〈サブカテゴリー〉、148の「コード」から成り立っており、その内訳は、〈分かりやすかった〉とする「コード」が28と最も多く、続いて〈よかった〉とする「コード」が18、〈興味深かった〉とする「コード」が13、〈勉強になった〉とする「コード」が12、〈理解できた〉とする「コード」が11、〈具体的だった〉、〈現場に即していた〉、〈意識の変化〉を示す「コード」が9ずつであった。【否定的意見】は6の〈カテゴリー〉、13の「コード」があり、〈時間不足〉を示す「コード」が4と最も多かった。【要望】は3の〈サブカテゴリー〉、10の「コード」から成り立っており、もっと聴きたいという〈各講師の先生方へ〉の要望の「コード」が5と最も多かった。

また、自分自身の変化に関して「明日さっそく教職員に報告したいと強く思ったから(3人)」等の「コード」から成る〈研修内容の伝達〉がある一方、感想・要望に関しては、〈対象を広げてほしい〉、〈管理職等にも聴いてほしい〉とする「コード」が多数見られた。

2) 教頭基礎研修

教頭基礎研修では、HPSについて、教員基礎研修と同様の5つの項目で質問したところ、図2に示すように、すべての質問項目で「出来る」「やや出来る」と答えたものが7～9割と多かった。『⑤今後の自分の実践の中

に具体的にに取り組む』という質問項目についても、肯定的な回答をしたものが教員基礎研修で4割に満たなかったのに対し、教頭基礎研修では、7割程度となっていた。

また、研修会の満足度に関しては、「とても満足している」が5名(14%)、「まあまあ満足している」が21名(60%)と、合計ほぼ7割の者が満足していた。

さらに、『自分自身の変化(研修を受ける前と受けた後で、何か自分で変化したことがありますか)』についての質問では、22名(63%)が変化したと答えた。

自由記述を分析した結果、その回答理由を【肯定的意見】、【否定的意見】、【要望】の3つのカテゴリーに分類された。【肯定的意見】のカテゴリーは、11の〈サブカテゴリー〉、25の「コード」から成り立っており、〈理解できた〉とする「コード」が8と最も多く、〈現場に即していた〉とする「コード」が4、〈意識の変化があった〉とする「コード」が3とつづいた。【否定的意見】と【要望】は、それぞれ1の〈サブカテゴリー〉と「コード」から成り立っており、その数はわずかであった。

4. 考察

2つの基礎研修の参加者に対する質問紙調査の満足度結果からは、肯定的回答が多かったこと、自由記述でも、〈よかった〉〈興味深かった〉〈勉強になった〉〈わかりやすかった〉などの【肯定的意見】の「コード」数が【否定的意見】の「コード」数よりも圧倒的に多かったこと

から、両研修ともに満足度が高かったといえる。ただ、満足度が肯定的であった者が、教員基礎研修では9割程度であった一方で、教頭基礎研修では、ほぼ7割であったこと、自由記述でHPSリーダー対象の内容を求める記述があったことから、今後はリーダー研修の必要性が考えられた。

『自分自身の変化（研修を受ける前と受けた後で、何か自分で変化したことがありますか）』についての質問では、教員、教頭ともに6～7割が「変化した」と答えたにもかかわらず、HPSについて、『⑤今後の自分の実践の中に具体的に取り組む』という質問項目については、肯定的な回答をしたものが教員基礎研修で4割に満たなかったのに対し、教頭基礎研修では、7割に上っていた。

学校全体で取り組むHPSであるため、管理職である教頭の方が、具体的に取り組むと考えやすく、また教員研修でも自由記述で〈管理職にも聴いてほしかった〉という意見があったことから、今後は、リーダー研修のプログラム開発を行う必要がある。

IV. 総合研修

1. 総合研修の内容

研修プログラムの開発に先駆けて行った課題別研修と前述した基礎研修を通して出てきた課題、本プログラムに対しての香港のHPS教員研修の専門家の意見（インタビュー調査）をもとに、総合研修のプログラムを検討・開発した。

課題別研修と基礎研修では短時間の講義を通じてヘルス・プロモーション・スクールの概論と一部の課題について研修を行ったが、実践的なスキルを養成していくために、それ以上に幅広いテーマを扱う実践的な研修プログラムを開発する必要がある。そこで総合研修では、表2に示したように大きく3つ、「HPS概論」「健康推進学校による実践紹介」そして「課題別研修」でHPS教員研修プログラムを構成した。健康推進学校による実践紹介では、2009年度健康推進学校表彰事業で優秀校として表彰された学校などから、小学校、中学校、高等学校各1校全3校を招き、実践紹介を行った。また、課題別研修については、表3に示したように千葉大学ヘルス・プロモーション・スクール・プロジェクトのメンバー等が、ヘルス・プロモーション・スクールで重要と考えられる13の研修を設定した。今回は、時間の関係上、課題別研修は選択式とした。

表2 総合研修プログラムの流れ

13:00～13:30	【HPS概論】
13:30～15:00	【健康推進学校による実践発表】 パネルディスカッション「HPSを今後日本でどのように進めていくか」 実践発表（小学校、中学校、高等学校各1校） コメンテーター3名（本学プロジェクトメンバー、教育委員会メンバー、学外専門家）
15:05～15:20	ピアノ演奏
15:35～16:30	【課題別研修】（表3を参照）

2. 研修対象・日時等

対象は、教員等約300名で、平成23年2月（3時間30分）に実施した。

3. 評価方法

当日の参加者約300名を対象に研修後に記入する質問紙調査を行った。回収された質問紙は211名で回収率は約70%であった。

4. 結果

1) パネルディスカッション（健康推進学校による実践発表を含む）に対する満足度

パネルディスカッション「HPSを今後日本でどのようにすすめていくか」の満足度について、「①満足している」から「⑤全く満足していない」までの5つの選択肢によって尋ねた質問項目の回答結果を表4に示した。

表4から「①満足している」「②おおむね満足している」を合わせると約7割近い参加者がパネルディスカッションに「満足」していた。

また、自由記述のうち、回答が多かったものや、今後に向けての改善点および検討課題として重要と思われるものを表5に示した。

パネルディスカッション後、参加した教員のメンタルヘルスに対するストレスマネジメントを意識したピアノ演奏は、多くの参加者から「よかった」等の肯定的記述が多数寄せられた。

さらに、パネルディスカッション後の13の課題別研修に対する参加者の感想を、5つの選択肢で満足度を尋ねた質問においては、いずれも「①満足している」「②おおむね満足している」が回答のほとんどを占めており、参加者の満足度は高かった。

表4 パネルディスカッション「HPSを今後日本でどのように進めていくか」についての満足度

選 択 肢	回答数 (%)
① 満足している	52(24.6%)
② おおむね満足している	94(44.5%)
③ どちらでもない	27(12.8%)
④ あまり満足していない	6(2.8%)
⑤ 全く満足していない	1(0.5%)
⑥ 無回答	31(14.7%)
合 計	211(100 %)

表3 総合研修における課題別研修

〈テーマ別各論〉

テ ー マ	内 容
フィジカルヘルスから考える健康的な学校づくり ～心と体のつながり～	現在の子どもたちが抱える問題について学んだ後、心と体に働きかけるワークショップを行った。教育現場で即実践できる様々な活動を紹介した。〈講義と演習〉
幼児期からの家庭・保護者との連携	子どもの健やかな発達にとって、学校と家庭の連携は不可欠である。保育所や幼稚園では、育児不安や児童虐待などの子育てをめぐる問題に対して、育児相談などの子育て支援が実施されている。本課題別研修では、保育カウンセラーの実践を踏まえ、幼児期からの家庭との連携の在り方、小学校・中学校以降にも共通する保護者対応の原則について具体的に解説した。
発達障害の二次障害を防ぐ	発達障害には、学習障害、注意欠陥・多動性障害、高機能自閉症などが挙げられる。一次的な障害特性は各々異なりますが、共通する二次障害が学校での不適応となって表われます。二次障害を予防・軽減する支援について協議した。〈講義と演習〉
思春期の精神保健	思春期の発達課題および精神病理を踏まえ、思春期の心の危機状況の理解と援助について検討した。疾患・問題行動として、摂食障害・過呼吸症候群・自傷行為・過量服薬（OD）などを講義を行った。〈講義〉
学校における事件・事故と こころのケア	予期せぬ突然の事件や事故によって学校コミュニティが危機事態に陥ったとき、何が起ころの だろうか。また、学校コミュニティの機能回復とこころのケアのためにはどのようなことが必要とされるのだろうか。本課題別研修では緊急支援の基礎を学んだ。〈講義〉
健康教育とメディアリテラシー	ゲームやケータイから離れられない「メディア依存」、ケータイをめぐるトラブル等を踏まえ、メディアに関わる健康教育の在り方を具体的に紹介した。〈講義〉
おいしさと食育	味覚実験を通しておいしさの要素を知り、調理の基礎「ゆでる」をとりあげ、実習によりおいしくする知識と技術を獲得し、学校における食育の在り方と課題について考えた。〈演習〉

〈方法論各論〉

テ ー マ	内 容
健康教育を通じて 子どもの実践力を高めるには	教え込みの健康教育から脱却して、子どもが主体的に学び、知識を活用する学習活動を取り入れることや、行動科学の成果を活用し、ヘルスプロモーションを基盤とした健康教育を行うことなどに関して、実践例を紹介しながら講義を行った。〈講義〉
健康課題を解決するための連携を考えるケースメソッド	本講座は、参加討論型のケースメソッドにより、子どもの健康課題を解決するためのアセスメントや対応策、連携方法を検討し、参加者が意思決定・問題解決できる手がかりを得ることを目的とした。〈演習〉

〈関係づくり各論〉

テ ー マ	内 容
造形活動を通じた人との関係づくり	造形活動を通して、活動参加者同士の関係づくりの一助となるような演習を行った。また造形をもとにした人や地域とのコミュニケーションづくりの活動事例も紹介した。〈演習〉
学び環境の閉鎖性と解放性	「学校不適応要因としての学級・学年制」をテーマにした。
グループの空気はどのように作られる	個人がグループの空気をつくり、その空気が個人の言動を誘発する相互作用の中で心身の健康も影響を受けている。どうしたら、グループの潜在性が解発されると個人ののびやかな成長も促進されるのだろうか。オートポイエーシスにヒントを得て実習形式で行った。〈演習〉

〈教員のメンタルヘルスに関するプログラム〉

テ ー マ	内 容
教員のメンタルヘルス	教員のメンタルヘルスについて実態調査と事例のメタ分析を提示しながら講義した。（初任者教員のメンタルヘルスを含む）〈講義〉
音楽と健康	研修参加者のメンタルヘルスに対して、ピアノ演奏によるストレス緩和等を狙った。音楽は言葉では伝えられないものを表現し、人間の精神に深く働きかける、根源的コミュニケーションであるといえます。音楽は感受性を育み、音楽を通して他者とのつながりを感じることは、心を豊かにする。〈ピアノ演奏〉

表5 健康推進学校による実践発表（パネルディスカッション「HPSを今後日本でどのようにすすめていくか」）の参加者の感想

<p>〈構成に関して〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間が足りない（内容が詰め込みになってしまった感じがある）。 ・ディスカッションの時間が短く、もっと議論があればよかった（議論より発表という感じだった）。 <p>〈パネルディスカッションの内容に関して〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・刺激・参考になり、自校でも今後取り入れたいと感じた。 ・実践内容が具体的でよかった。 ・多様な取り組みが紹介され、参加者のニーズに応えられたのではないかと感じた。 ・実践内容が「理想」という感じで取り組みづらいと感じた。 ・地域・組織連携の重要性を痛感した。
--

5. 考察

質問紙調査からは3校の実践発表を含むパネルディスカッションの内容は、具体的で多様な実践が紹介された点が評価された。一方で、参加者にとって「理想」の提示と受け止められ、距離感を感じる者もいたことが伺われる。従って、今後は、これからHPSに取り組もうとしていたり、現実的な課題を抱えていたりする実践現場のニーズも汲み取った内容を計画する必要がある。その一つとして、進め方の具体的提案などが有効であろう。

さらに、パネルディスカッション後、参加した教員のメンタルヘルスに対するストレスマネジメントを意識し

たピアノ演奏は多くの参加者から好評を得ており、芸術活動のアウトリーチを含むHPSの幅広い取り組みをアピールすることにもつながったといえる。

また、自由記述からパネルディスカッションや課題別演習の時間の短さを指摘する意見が多かった。今回の課題別研修は10研修が55分、3研修が90分と一般的な教員研修の時間と比べると短かったものが多かったことから、研修時間の長さは、実施可能性も考慮しつつ、十分検討する必要がある。

V. 総合考察

以上の結果を踏まえて、本教員研修プログラムに対して、教育学部メンバーと教育委員会メンバーで検討を行った。その結果、本HPS研修プログラムの課題と方向性については表6のような意見がでた。

VI. まとめと今後の課題

2010年度は比較的短い時間で実施可能なプログラム開発を行ったが、今後は、多様なニーズに応じるべく、理想的なプログラムとともに、様々な内容と長さのパッケージ型HPS研修プログラムを開発する必要性が考えられた。今後のHPS研修プログラム開発は表7の方向で行う必要が考えられた。

今回の研修プログラムの次には、さらに「1. 多様なニーズに沿った研修プログラムの開発」が必要と考えられた。一つは、管理職など、「1）リーダー対象研修ブ

表6 本HPS研修プログラムの課題と方向性についての意見（総合評価）

<p>〈研修内容について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践例については、「理想形」やモデル提示だけでなく、多くの学校ではそうできない制度的・構造的課題を取り上げることも重要だと思った。 ・今後のHPSを進めて行くうえでの課題を明らかにするなどの視点があればよかった。 ・これまでの学校保健とHPSとの違いを明確にできたらよかった。 ・「健康」の概念化や定義が今後の課題となると感じた。 <p>〈内容の吟味について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員のメンタルヘルスや虐待等、関心の高いテーマに焦点を絞ってもよい。 ・今後はより関心の高いもの、より焦点を絞ったもの等、全体的に研修運営を検討していく必要がある。 ・課題別研修は参加者の背景が多様であり、どこに焦点化して内容を構成したらよいか、検討が必要だった。 ・様々な地域の取り組みが必要になってくるため、研修はニーズに応じたパッケージ型を考えていく。 <p>〈対象について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・HPSを進めて行くには管理職に参加してもらう必要がある。 ・現職の経験豊かな者と初任者等、それぞれのニーズに合わせていく必要がある。（初任者向け、5、10年研修向け等） <p>〈HPSのプロセスと研修について〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・HPSとは自力でやり続ける学校、部分的でなく統合的に健康づくりができる学校、それを明確に打ち出していく。事前調査等を行いながら、その学校が自力で考え、HPSを実施出来るように支援をしていく必要がある。 ・現在の学校は基盤がバラバラであるという印象を持つ。HPSが学校管理マネージメントの基盤となることが重要である。学校安全計画、学校保健計画を基盤に考える。 <p>〈これからの学校現場の状況を考慮した内容検討〉</p> <p>これからの学校がどのようになっていくのか、見通しを持って本研修プログラムの今後を考える必要がある。ここ10年間で学校は大きく変化する。一つの例として、若手教員の数が急激に増加し、中堅年齢層の教職員の数が少なくなるという問題がある。10年、20年後の学校の職員関係、組織としての指導力、若手教員を短期間に育成することが必要となることも踏まえた管理職研修や教員研修が必要となるだろう。その中であって子どもたちをどのように教育すべきか。10年後を見据え考える必要がある。初任者研修をはじめ、教員研修の内容をどうすべきかなど、大きな課題である。例えば学校内では解決しない問題を地域の学校が連携し地域の学校全体で考えて行くなどの研修の方法や工夫が必要である。ベテランの先生は、現在の若い先生のコミュニケーションの取り方を非難したり、自分たちの時代のやり方を復活させたよとばかりするのではなく、今の状況をどうとらえて、それに対処していくのかを考えることが大切である。以上、学校教員の全体年齢分布など、大きく変化することから、教員のメンタルヘルスなど、本プログラムを発展させていけるとよい。</p>
--

表7 今後のHPS研修プログラム開発の方向性

- | |
|--|
| 1. 多様な研修プログラムの開発
1) リーダー対象研修プログラムの開発
2) 理想的な研修プログラムの開発
3) パッケージ型研修プログラムの開発
2. HPSチェックリストと学校保健計画等を活用したHPSの具体的な進め方の方法論」の開発 |
|--|

プログラムの開発」である。また、香港では、HPSに取り組む学校のHPS担当者には最低でも2週間のトレーニングを受けてもらっているそうである。このように、「2) 理想的な研修プログラム」を開発し、現実的には、それをポイント制等にして、履修していく方向の研修プログラムの開発する必要がある。

さらに、例えばどのような研修が必要であるかオーダーを頂いた後に、ニーズが高い代表的なパッケージ型研修をいくつか作り、それを選んでもらうような「3) 様々なパッケージ型研修プログラムの開発」が必要である。

また、学校保健とHPSとの違いを明確にする、理想的なものの提示だけではないほうがよいという意見から、具体的に学校で具現化するための「2. HPSチェックリストと学校保健計画等を活用したHPSの具体的な進め方の方法論」の開発を行い、それをプログラムの中に取り入れる必要があると考えられた。

VII. 本プログラムに係る成果発表

2010年7月に、スイスのジュネーブで開催された学校保健シンポジウム—Linking Health, Equity and Sustainability in Schools—に参加し、日本のヘルス・プロモーション・スクールの現状について様々な角度から発表を行った。また2010年12月に開催された、The 2nd East Asian International Conference on Teacher Education Researchにて、「Health promoting school and education program for teachers」という題目でシンポジウムを行った。

謝 辞

本研究は、2010年度独立行政法人教員研修センターの「教員研修モデルカリキュラム開発プログラム」の助成を受けて実現しました。心から御礼申し上げます。

引用文献

朝日新聞社編 (1998)：健康優良・推進学校の軌跡～小学校の心づくり体づくり，3-196，朝日新聞社文化企

画局

衛藤隆，永井大樹，丸山東人，張彤，露木玲 (2005)：Health Promoting Schoolの概念と実践，東京大学大学院教育学研究科紀要，44；451-456

IUHPE (International Union for Health Promotion and Education) (2008)：Achieving health promoting schools: guidelines for promoting health in schools. version 2 the document formerly known as “protocols and guidelines for health promoting schools” 2008, www.iuhpe.org

IUHPE (International Union for Health Promotion and Education) (2009)：PROMOTING HEALTH IN SCHOOLS FROM EVIDENCE TO ACTION www.iuhpe.org

籠谷恵，齋藤理砂子，三浦沙織，岡田加奈子 (2009)：台湾におけるヘルス・プロモーション・スクールの概要と特徴—文献を中心に—，千葉大学教育学部紀要，57，247-251

鎌塚優子，展偉生，籠谷恵，高橋浩二，戸澤京子ら (2010)：台湾のヘルス・プロモーション・スクールの概要と特徴—文献・学校視察事例を基に—，東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科，学校教育学研究論集，21，127-135

Lee, A., Ho, M. Leung, T.C.Y., Cheng, F.F.K., Tsang, K. K., Suen, Y.P., et al, Hong Kong Healthy Schools Project Team. (2004)：Development of indicators and guidelines for the Hong Kong Healthy Schools Award Scheme. Journal of Primary Care And Health Promotion 1: 4-9. ISBN 1811-931X, 2004.

Lee, A. et al (2007)：The status of health-promoting schools in Hong Kong and implications for further development Health-promotion International, 22 (4), 316-326.

岡田加奈子，吉田由美，高橋青衣，鶴岡和世，籠谷恵 (2010)：香港のヘルス・プロモーション・スクールの概要と特徴，千葉大学教育学部紀要，58，341-346

東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科ヘルス・プロモーション・スクール研究プロジェクトチーム (2010)：平成20・21年度アジア型ヘルス・プロモーション・スクール（健康的な学校づくり）モデルの構築報告書

World Health Organization (1998)：“WHO’s Global School Health Initiative Health Promoting Schools A healthy setting for living, learning, and working” World Health Organization, Division of Health Promotion, Education and Communication, Health Education and Health Promotion Unit Geneva, Switzerland.